

新収蔵品展

——松江藩士 畑家の刀剣——

松江歴史館は、開館後8年を迎えようとしています。その間、市民の方々などから様々な松江に関わる貴重な資料をご寄付いただいています。今回のスポット展では、新しく受け入れた松江藩士畑家に伝来した刀剣を展示します。

畑家は、1630年ごろに信濃国松本の藩主であった松平直政に登用されて藩士となります。80石から300石を給した藩士として9代続き、明治維新を迎えています。その子孫は上京し、第二次世界大戦では陸軍の士官となってインパール作戦などに従軍した後、無事に帰国しました。

この度、「先祖が松江人として愛して止まなかった松江の土地に戻りたい」とのお話をいただいて寄贈を受けた松江藩士の家伝来の刀剣をご覧ください。



刀 表銘：一条信濃守藤原國廣

(1606年)
裏銘：慶長十一年二月日

刃長：70.9cm 反り：1.0cm



銘によれば、刀を鍛えたのは京都堀川一条に住んでいた堀川国^{ほりかわくに}広^{ひろ}である。国広は慶長新刀の巨匠で、文化財に指定されている刀剣も多い。本作は国広晩年（慶長19年没）のものである。

目貫^{めぬき}は北斗七星^{ほくとしちせい}を意匠としている。北斗七星の柄先を破軍星^{はぐんせい}といい、戦の吉凶を占った。



目貫（柄の飾り）



刀 銘：信濃大掾藤原忠国

刃長：64.8cm 反り：1.8cm



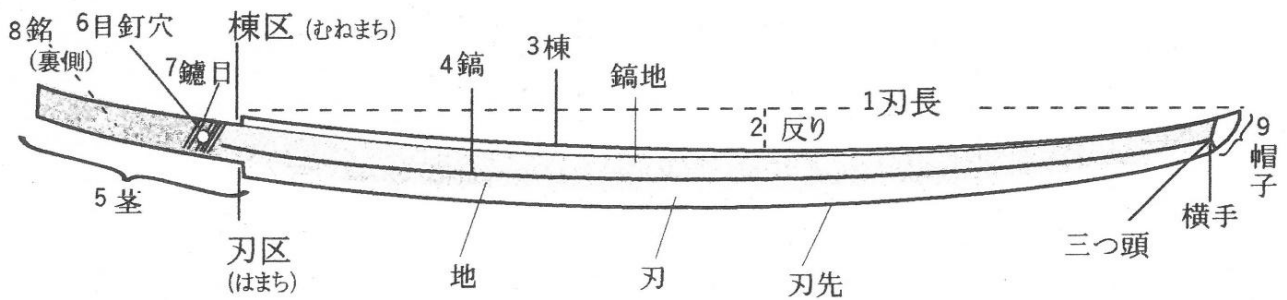
刀を鍛えたのは、鳥取藩池田家の刀工である^{しなの だいじょうただくに}信濃大掾忠国（初代）で、江戸時代前期のものである。初代忠国は京都で生まれ、鳥取藩に召し抱えられて鳥取に移る。以降、代々鳥取藩お抱えの刀工として7代続いた。



目貫（柄の飾り）

寄贈者の父が出征した際に外装を整え、^{ぐんとうこしら}軍刀拵えとなっている。
^{さや いしめぬり めぬき}鞘は石目塗、目貫は陸軍を示す桜の意匠である。

刀各部の名称



1 刃長…じんちょう

2 反り…そり

3 棟…むね

4 鎬…しのぎ

5 茎…なかご（中心とも書く）

6 目釘…めくぎ

7 鑓目…やすりめ

8 銘…めい

9 帽子…ぼうし（切っ先の刃文）